

「ラストピース」

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18） 大学1年生  
高橋湊（22） 理菜のアパートの隣人  
鈴木健一（32）（41） 理菜の育ての父  
鈴木香澄（32）（41） 理菜の育ての母  
前田聡（40） 理菜の実の父  
前田明日香（35） 理菜の実の母  
ラリー（6） 理菜が飼っていた犬

花村夏凜（18） 理菜の親友  
市川拓也（18） 理菜の親友  
西原圭吾（18） 市川の友達  
成宮翔（18） 市川の友達  
阿部宏樹（58） 理菜の主治医  
金原武（55） 理菜のストーカー  
少年（13）

男

アナウンサー

配達員

○長野県・高架道路

左斜線を走る一台の乗用車。東京のナンバプレート。

○鈴木家の車・車内

父・鈴木健一（41）が運転する車内。助手席には鈴木理菜（18）、後部座席には母・鈴木香澄（41）が座る。音楽がかかっている、理菜と香澄がノリノリで歌唱している。鈴木、運転しながら楽しそうに聴いている。

フロントガラスから見える標識には「古諏訪町1 km」と。

1

○霊園・入り口

看板には「霊園入口」の矢印。鈴木家の車が砂利の坂道を上っていく。

○同・駐車場

鈴木家の車が駐車。

理菜、鈴木、香澄が車から降りる。

鈴木「いい天気だなあ」

理菜「私晴れ女だからね」

香澄「ニコニコしながら」あら？　でもこの

間市川くんとデート行った時は途中で雨降

ってきたんじゃない？」

鈴木「瞬きをしながら」ちよつと、今なんて？」

理菜「あれは別にデートじゃないってぼろだ  
って夏凜も一緒だったし。拓也とはそんな  
んじゃないよ」

鈴木「たっ、たく：：？　ごめん理菜。お父  
さん話についていけない：：：」

と、頭を抱える。

理菜、鈴木をスルーして足取り軽く歩  
いて行く。

鈴木、助けを求めるように香澄の方を  
見る。

香澄「デートじゃないって。良かったねへに

っこり」

香澄も理菜の後を追う。

鈴木「俺聞こえてたからな!? 市川拓也くん  
って? デートって? ちよっと2人と  
も!」

鈴木、走って2人を追いかける。  
理菜と香澄、「キヤー」と笑いながら  
走り出す。

### ○同・墓地

小高い丘の上に並ぶ15ほどの墓石。  
人は誰もいない。

眼下には諏訪湖と古諏訪町の街並みが  
広がる。

理菜たち、墓石の間を進み「前田家之  
墓」の前で止まる。

香澄、墓石に水をかけ、鈴木が磨く。  
理菜、持ってきた花を瓶に挿す。

鈴木「さ。お義姉さんたちに挨拶しよう」  
鈴木と香澄、墓石の前で丁寧の手を合

わせ、目を閉じる。

理菜もその後ろで目だけ閉じる。

鈴木、15秒ほどで振り返り理菜の肩をトントンと叩く。

理菜、目を開ける。

香澄「ゆっくりいいからね」

理菜「ありがとう」

鈴木と香澄、来た道に戻る。

理菜、墓石の前にしゃがみ込み、手を

合わせて目を閉じる。

理菜M「パパ、ママ、元気ですか？ 私は相

変わらず元気です。もうすぐ憧れの大学生  
活がスタートします。お母さんたちにわが  
ままを言って、一人暮らしをさせてもらえ  
ることになりました。学校に家事に忙しく  
なるだろうけど、充実した毎日になりそう  
です」

理菜の頬を涙が流れる。

理菜、目を開けて涙を拭う。

理菜「また来るね（笑顔）」

と、墓石に触れて立ち上がる。

○同・駐車場

車に寄りかかり、薄咲きの桜を眺める

鈴木と香澄。

理菜、坂の上から、

理菜「お待たせー！」

と、手を振りながら小走りする。

鈴木「慌てて〜転ぶから走らなくていいぞ

ー！」

理菜「子供じゃないんだから転ばないよ〜」

香澄「ほんと。そろそろ子離れしてくれない

と困っちゃうわよねえ」

理菜「ねえ？」

理菜と香澄、顔を見合わせる。

鈴木「あーー聞こえないーー。俺の辞書に

子離れの文字はないんだ」

と、耳を塞ぐ。

香澄「ねえ、お昼蕎麦食べて帰らない？」

理菜「いいね！ 久しぶりに安曇庵の蕎麦食

べたい」

香澄「行こっか！」

香澄、ドアを開けて車に乗り込む。

理菜「お父さん行くよー」

と、ドアを開けて乗り込む。

鈴木「慌てて」待って待って」

と、車に乗り込む。

坂を下りていく鈴木家の車。

○鈴木家・外観（夜）

欧風、2階建の戸建て住宅。

外壁には「鈴木」のネームプレート。

○同・理菜の部屋（夜）

理菜、部屋に入り電気をつける。

部屋の家具は、ベッド、勉強机、本棚、クローゼット。

物は少なく、その代わりにパッキングされた段ボール箱があちこちにある。理菜、懐かしそうに勉強机に触れる。



ベッドにボタンと仰向けで倒れ込み、  
深呼吸をして目を閉じる。

○（理菜の回想）公園・中（夕方）

ベンチの上にはピンク色のランドセル  
と紺色のスクールバッグが置かれてい  
る。

理菜（9）、キャハキャハと笑って楽  
しそうにブランコに乗る。

少年（13）が横で漕ぐのを手伝う。

どんどん高くなるブランコ。

理菜、ブランコが上がったタイミング  
で、色づき始めた銀杏の木に向かって  
手を伸ばす。

× × ×

たこの滑り台の上で足を伸ばして並ん  
で座る理菜と少年。

理菜「来週も来る？」

少年「うん。来るよ」

理菜「来週の来週もずっと？」

少年「来週の来週の来週もずっと」

理菜、パツと顔を明るくする。

理菜「約束だよ！」

と、小指を差し出す。

少年、理菜の小指に自分の小指を絡める。

理菜「ゆびきりげんまん、ウソついたらはり千本のーます」

理菜・少年「指切った！」

理菜と少年が笑顔で見つめ合うが、夕日が眩しくて少年の顔がはつきりしない。

○鈴木家・理菜の部屋（朝）

理菜（18）、ベッドの上で目を覚ます。

窓からは外の光が差し込んでいる。

理菜、天井を見つめながら、理菜M「まただ。お墓参りに行くと、決まってる。あの時のことが夢に出てくる。彼は一体

誰だったのか。名前も、顔すらも思い出せないけど。でもあの頃の私にとって、彼の存在は救いだった。それだけは覚えている」

○（理菜の回想）公園・中

理菜（9）、ワクワクしながら走って公園に入ってくる。

しかし公園には誰もいない。

理菜「ねえ！ どこ！」

理菜の声がしんとした公園内に響く。

理菜、たこの滑り台の下を覗き込む。

9

理菜「いないの？」

しかし、誰もいない。

理菜「（寂しそうな顔）…」

風が吹き、銀杏の葉がヒラヒラ落ちる。

○鈴木家・理菜の部屋（朝）

理菜（18）、布団の中に入ったまま。

天井に向かって、

理菜「なんで急に来てくれなくなったの…」

：？  
」

理菜、深呼吸をしてスッキリした顔で  
ベッドから起き上がる。

○同・キッチン（朝）

リビングダイニングに面したキッチン。  
香澄、キッチンで朝食の用意をしてい  
る。

理菜、キッチンに入って来て、

理菜「おはよう」

香澄「おはよう。パンでいい？」

理菜「うん」

香澄「お湯できてるから、好きなティーバッ

グ選んでね」

理菜「お母さんも飲む？」

香澄「じゃあ、お願い」

理菜、箱からティーバッグを2個取り  
出して、2つのコップに入れてお湯を  
注ぐ。

○同・リビングダイニング（朝）

理菜、トーストの皿とコップを持って

ダイニングテーブルの席に着く。

ダイニングテーブルの上にはフルーツ

が盛られた皿。

テレビではニュースがついている。

香澄も来る。

理菜「いただきます」

と、手を合わせる。

香澄、微笑みながら理菜を見つめる。

理菜、トーストをかじって、

理菜「どうかした？」

香澄「首を横に振って」もう理菜とこうして

一緒に朝ごはん食べれなくなると思うと寂

しくて」

理菜「やだお母さん大袈裟だよ！ 電車で

すぐ帰れる距離だし、朝ごはんくらいいつ

でも一緒に食べれるよ」

香澄「明るく」そうね！」

理菜、微笑む。

アナウンサー「東京都広尾台で一家が殺害された事件から今日で3年が経ちました。犯人は未だ捕まっていません。遺族が苦しい胸の内を語ってくれました」

理菜、怖い顔をして真剣にテレビ画面を見つめる。

○（理菜の回想）前田家・理菜の部屋（夜）

理菜（9）、勉強机で計算ドリルをしている。

壁掛けの時計が間もなく7時になろうとしている。

理菜、ドリルを閉じて部屋を出る。

○（理菜の回想）同・階段（夜）

理菜「おっなくかくすい……た……」

理菜、陽気に階段を下りていき、途中で止まる。

階段下には大理石の広々としたリビン  
グ。

ローテーブル近くで刃物をもった男が立ち尽くしている。

包丁からはポタポタと血が滴る。

男の足元には、ぐったりとした血だらけの犬・ラリィ（6）の姿。

理菜「息をのむ〜ラリィ……？」

そのそばで母・前田明日香（35）がうつ伏せに横たわり、ペルシャ絨毯から大理石の床に向かって真っ赤な血が流れている。

理菜「震えた声で〜ママ？」

理菜の瞳が揺れる。

玄関からリビングに続く廊下に、手を伸ばし同じく血を流して倒れている

父・前田聡（40）。

理菜「泣きそうな声で〜パパ……」

男が理菜を見る。

黒いフードをかぶっていて顔はよく見えない。

理菜、腰を抜かす。

恐怖と絶望の表情で這うように階段を上る。

○（理菜の回想）同・衣装部屋（夜）

ハンガーに掛けられた洋服がコの字型にびっしりと並んでいる。

理菜、服の間に隠れるように体育座り。口を両手で押さえ、服と服の隙間から部屋のドアをじっと見つめる。頬は涙で濡れている。

○鈴木家・リビングダイニング（朝）

理菜（18）、肩で浅く呼吸をしながらテレビ画面を見つめている。

拳をギュッと握りしめる。

香澄の声「理菜……理菜……理菜！」

理菜、ハッと我に返る。

テレビは散歩番組に変わっている。

理菜「明るくごめん、ポーツとしてた」

理菜、まだ呼吸が速く、握った手が震



えている。

香澄、理菜を見て、

香澄「優しく」理菜、ゆっくり息吐いて」

理菜、「ふうー」っと息を吐く。

香澄「今度はゆっくり吸う」

理菜、ゆっくり息を吸う。

香澄「穏やかに」ちよつと落ち着いた？」

理菜「ホツとして」うん。ありがとう」

香澄、理菜の方へ行き、座ったままの

理菜を抱きしめる。

香澄「んー。大丈夫、大丈夫よ」

と、背中をトントンとする。

理菜「うん」

と、香澄の腰に手を回す。

鈴木「ねえ、俺の靴下知らない？」

と、ダイニングに入ってくる。

抱きしめ合う2人を見て、

鈴木「ズルいぞ2人だけで！」

鈴木、両腕を広げて理菜と香澄を抱きしめる。

香澄「（楽しそうに）やだ暑苦しい〜」

理菜「あははは〜」

笑い合う3人。

テーブルの後ろにある小物棚には写真が並ぶ。

学校行事で撮った理菜の写真、家族で旅行に行った写真、高校の卒業式に撮った写真など。

真ん中には前田（40）、明日香（35）、理菜（9）、ラリー（6）、鈴木（32）、香澄（32）が一緒に映った写真。

### ○総合病院・精神科・待合室

オルゴール音楽が流れている。

理菜と香澄と鈴木、ソファに座って待つ。

モニターに「32」の番号が表示。

理菜が持っている紙も32番。

理菜「行ってくるね〜」

と、立ち上がり診察室に向かう。

○同・診察室前

理菜、ドアをノックする。

阿部の声「どうぞー」

理菜、ドアを開けて顔を覗かせる。

医師・阿部宏樹（58）がパソコンの  
前に座っている。

理菜「嬉しそうに」先生こんにちは」

と、手を振る。

阿部「優しく」いらっしやい理菜ちゃん」

○同・診察室内

理菜、阿部の前の椅子に座る。

理菜「なんか久しぶりな感じがする」

と、診察室の中を見渡す。

阿部「前は高校3年生になった春だったか  
ら、ちょうど1年ぶりかな」

理菜「先生元気でしたか？」

阿部「うん、元気だよ。理菜ちゃんはどうか？」

理菜「私も元気です！ 来週から一人暮らし  
します（ピース）」

阿部「そうだったね。早いなあ。理菜ちゃん  
ももう大学生か」

理菜「先生に初めて会ったのが小4？ 小  
5くらいだから：：9年前!? こわー！」

阿部、微笑む。

阿部「最近何か困ったことはない？ ちゃん  
と眠れてる？」

理菜「うーん：：眠れてはいるんですけど、  
先生に聞きたいことが」

阿部「なになに」

理菜「過去に実際に経験した出来事を夢で見  
るのっておかしいですか？」

阿部「そんなことないよ。夢は記憶の整理に  
関係してるとも言われてるからね」

理菜「そっか」

阿部「心配そうに」それは嫌な記憶？」

理菜「笑顔で」ううん。楽しかった思い出。  
でも、楽しかったはずなのに、大事なこと

が思い出せなくて。それがずっともどかしいんです」

阿部「どんな夢か聞いてもいい？」

理菜「あれはまだ先生に会う前かな？ 私が鈴木家の家族になったばっかりの頃。学校が終わってから、よく公園に行ってたんです。誰も知らない、秘密の公園」

阿部「1人で行ってたの？」

理菜「そう、1人で。あ、お母さんたちには内緒ですよ」

阿部、頷く。

理菜「学校の友達は、実の両親を亡くした私を可哀想に思っ、みんなすごく優しく接してくれてたけど、それが逆に苦しくて。かと言って、お母さんたちともまだぎこちないから、家にもギリギリまで帰りたくなくて。それで公園で時間潰してたんです」

阿部「（目を丸くする）そんな話初耳だよ」

理菜「あれ、先生に話してなかったかな。それでその公園に、中学生のお兄ちゃんがい

ることがあって、よく遊んでもらってたんです」

阿部「おお」

理菜「でもあんなに遊んでもらったくせに、そのお兄ちゃんの顔も名前も全然思い出せないんですよ」

阿部「なるほどねえ。その後そのお兄ちゃんとは？」

理菜「私がすぐ東京に引っ越すことになって、それっきり。引っ越すこと伝えに公園まで行ったんだけど、会えなかったんです」

阿部「そうなんだ」

理菜「もう会うこともないし、考えても仕方ないんですけどね」

阿部「それは分からないよ。世間は狭いからね。もしかしたら、2人は再会する運命かもしれない」

理菜「でも先生。私、そのお兄ちゃんの顔も名前も覚えてないから、会っても気づけないですよ」

阿部「あ、そうか……」

理菜「先生も運命とか信じたりするんですね。  
ちよつと意外かも」

と、クスクス笑う。

阿部、照れくさそうに咳払いする。

理菜「たくさん話しすぎちゃった。お母さん  
たち呼んできます」

と、立ち上がる。

阿部「またいつでもおいで」

理菜「はい。先生ありがとうございました」

理菜、診察室を出ていく。

21

### ○同・待合室

鈴木と香澄、座ってスマホを見ている。

理菜「お待たせ」

理菜、香澄の隣に座る。

鈴木と香澄、鞆を持って立ち上がる。

香澄「下のカフェ行ってもいいよ」

理菜「そうだね、そうする」

○同・診察室内

鈴木と香澄、阿部の前に座る。

阿部「理菜さんがもう一人暮らしをする年になったなんて驚きました。あれから10年近く経つんですね。どおりで私も年をとるわけだ（苦笑）」

鈴木「私たちも、あの事件が昨日のこのようににも思えるし、大昔のようにも感じます」

香澄「理菜がこうして元気に生活できてるのは先生のおかげです。本当に、感謝してもしきれません」

阿部「いえいえ。お父さんとお母さん、周りの方の支えがあったから、理菜さんも乗り越えられたんですよ。私としても、こうして理菜さんの成長を見守ることができて嬉し  
しいです」

鈴木「これからも、どうぞよろしく願います」

鈴木と香澄、頭を下げる。

阿部「こちらこそ」



と、会釈。

阿部「お2人から見て、最近の理菜さんの様子はいかがですか？」

鈴木と香澄、顔を見合わせる。

香澄「やっぱり、殺人事件のニュースとかを見るとフラッシュバックしてしまうみたいで、過呼吸になります。声をかければ落ち着くんですけど、それが辛そうで……」

鈴木「これは、一生続いてしまうんでしょうか？」

阿部「そうですね……大切な人を失うだけでもトラウマティックなのに、理菜さんの場合は惨い現場を直接見てしまってますから。それによるストレスは計り知れません」

鈴木と香澄、顔が曇る。

阿部「でもさっき、理菜さんが私と会った頃のことを話してくれましたけど、とても落ち着いてましたよ。自分で気持ちをコントロールできている証拠です」

香澄「安心した顔で」そうですか」

鈴木「安心した顔で」良かったな」

阿部「理菜さんは何でも抱え込みすぎてしま  
うところがありますから、何か気になるこ  
とがあればまたいつでも来てください。理  
菜さんにもそう伝えていきます」

鈴木・香澄「はい。ありがとうございます」

○鈴木家・リビングダイニング（夜）

ダイニングテーブルには大皿に乗った  
ご馳走が並ぶ。

理菜、鈴木、香澄がテーブルを囲んで  
食事中。

香澄「そうだ。アパートのご近所さんにお菓  
子買うの忘れてた」

理菜「ああ。そっか、そういうのいるのか」

鈴木「いやあいんじやないか？ 最近はご  
近所付き合いかも少ないし、かえって気  
を遣わせるだろ」

香澄「そうは言ってもねえ」

鈴木「若い女の子の一人暮らしだって知られ

るのは良くないよ。顔を合わせた時に挨拶だけすればいいさ」

香澄「そうね。彼氏の服とかベランダに干しておくとか防犯になるから、置いといてもらいなさいね」

鈴木「そうそう彼氏の服とか……ん？　か、彼氏!?　ちよつと待て、お父さん聞いてないぞ。あれだな、市川拓也くんだな！」

香澄「ニヤニヤして」ほら、ビール倒さないようにね」

香澄、鈴木のグラスを移動させる。

理菜「お父さん安心して。私彼氏なんていないから。拓也は彼氏じゃなくて大事な親友」

香澄「今は、いないだけよ。大学に入ったらこれまでとは比べものにならないくらい出会いの幅が広がるんだから」

鈴木「いいか理菜。前に政治家も言ってたけど、男との三密には気をつけるんだぞ！　密閉密集密接。どんなにイケメンだからって、騙されちゃダメだからな！」

理菜「笑いながら」それ使い方違うけどね」

○アパート・正面へ理菜の部屋

鈴木家の車が2階建てのアパートの前に着く。

アパートは各階3部屋ずつある。

香澄「理菜は先に行って鍵開けてきちゃって」  
理菜「分かった」

理菜、アパートの外階段を登る。

3つある部屋の真ん中のドアの鍵を開ける。

部屋の中は玄関から廊下の先に7畳ほどのワンルーム。

カーテンのない窓から外の光が差し込む。

理菜、満面の笑み。

鈴木「とりあえず中に運び込むな」

鈴木、段ボールを3個持ってくる。

理菜「うん。ありがとう」

後ろから香澄が段ボールを1つ持って

くる。

理菜、ドアストッパーを出して車に段ボールを取りに行く。

× × ×

鈴木家の車の後ろにトラックが停まっている。

若い男性の配達員が大きな段ボールを運んでいる。

○同・理菜の部屋の中（夕方）

レースのカーテン越しに夕焼けが差し込む。

ワンルームにはデスクと椅子、ローテーブル、ソファ、ベッドが設置されている。

床にはまだ中身が入っている段ボール箱が数個残る。

鈴木、畳んだ段ボールを紐で縛る。

鈴木「さてと。こんなものかな」

香澄「あとはゆっくり荷物出してね」

理菜「うん、そうする」

鈴木、段ボールを持って理菜の部屋を出て行く。

香澄「まさか理菜が一人暮らしなんてねえ。

いつの間にこんなに大きくなっちゃって」

理菜「うちから通えばいいのに、……わがま

ま聞いてくれてありがとう」

香澄「可愛い子には旅をさせよって言うしね。

でもさつきお父さんも言ってたけど、変な

人多いから気をつけてね。何かあったら相

談すること」

理菜「うん」

香澄、理菜の頭を撫でながら、

香澄「理菜は目に入れても痛くない、私たち

の愛娘なんだから」

理菜、涙ぐみながら香澄に抱きつく。

香澄も理菜を抱きしめる。

香澄「んゝ。寂しくなるわね。ご飯食べに来るだけでも、いつでも帰って来ていいんだからね」

理菜「うん」

○同・正面く理菜の部屋（夕方）

走り去る鈴木家の車。

理菜、車が見えなくなるまで手を振り

続ける。

階段を上り、部屋の前に戻る。

何気なく左隣の部屋を見て、部屋の中に入る。

○同・理菜の部屋の中（朝）

理菜、エプロンをつけてキッチンの前で料理。

泡立て器で生地を混ぜている。

× × ×

熱したフライパンにバターを入れて、フライパンを傾ける。

おたまでボウルの生地をフライパンに流し込む。

× × ×

理菜、フライ返しを生地の下に入れ、  
真剣な顔でひっくり返す。  
表面は綺麗な焼き色が付いている。

理菜「やったー！」

と、ガッツポーズ。

× × ×

テーブルの上にはランチョンマットが敷かれ、バターと蜂蜜が乗ったホットケーキに、フルーツが入ったヨーグルト、カットサラダ、マグカップに入った紅茶が置かれている。

理菜、エプロンを脱ぎながらソファに座ってスマホで写真を撮る。

SNSを開いて写真を投稿。「一人暮らし初料理」と。

理菜「手を合わせていただきます」

理菜、スマホを見ながら朝食を食べる。

【karin】から「絶対遊びに行く！」とコメントがくる。

理菜、「待ってる！」と返信。



理菜「んーおいし」

と、ホットケーキを頬張る。

× × ×

シンクの中にはボウルや皿など大量の  
洗い物。

理菜、順番に洗って水切りカゴに置いていく。

○同・理菜の部屋の前

理菜、ドアを開けて外に出る。

右隣を見ると、高橋湊（22）が部屋の  
ドアを開けようとしている。

背が高く、端正な顔立ち。

理菜「こんにちは！ 私隣に引っ越してきた、」

と、言葉を続けようとするが、

高橋「（軽く頭を下げて）…どうも」

と、そそくさと部屋の中に入る。

理菜、閉まったドアに向かって、

理菜「鈴木…です」

と、固まる。

○住宅街・道

理菜、アパートを背にして歩いている。

○アパート・高橋の部屋の前

ゆつくりと部屋のドアが開く。

高橋、開いたドアの隙間から、歩いている理菜の背中を見つめる。

○同・ゴミ捨て場く高橋の部屋の前（朝）

理菜、ゴミ捨て場に袋を置く。

後ろから高橋がゴミを捨てに来る。

理菜「おはようございます。あ、すみません」

理菜、急いで避けて場所を譲る。

高橋「……どうも」

理菜M「また『どうも』か（苦笑）」

理菜、部屋に戻って行く。

高橋「……最近引っ越してきた人？」

理菜、足を止めて振り返る。

理菜「はい！ 隣の鈴木です。よろしくお願  
いします」

と、頭を下げる。

高橋「ボソツと」高橋です」

高橋、理菜の横を通り過ぎて先に階段  
を上り、部屋に戻る。

理菜、高橋が部屋に入るのを見つめる。

理菜M「悪い人ではない……のかな？ ちよ  
っと怖いけど」

### ○武道館・外観

スーツ姿の学生がたくさんいる。

入り口前には「三田大学 入学式」の  
立て看板。

理菜と親友・花村夏凜（18）、香澄  
に手を振って別れる。

### ○三田大学・敷地内

理菜と夏凜、並んで歩く。

周りには同じようなスーツ姿の学生た

ち。

夏凜「一人暮らしはどう？　楽しい？」

理菜「今のところなんとか。毎日バタバタだ  
けどね」

夏凜「ニヤニヤしながら）同じアパートにイ  
ケメンとか住んでないの？」

理菜「そういえば、お隣さんがね」

夏凜「いるのイケメン!？」

理菜「確かにカッコいいんだけど、でもちよ  
っと怖いんだよね。何考えてるか分からな  
いっていうか」

夏凜「目を輝かせて）ミステリアスな人って  
こと!?!　いいじゃん」

駆け寄ってくる足音。

市川「理菜！　夏凜！」

親友・市川拓也（18）が合流する。

理菜「やつほー」

夏凜「ねえねえ。理菜一人暮らし始めたって」

市川「あ、そうじゃん」

夏凜「いいなあ一人暮らし。うちなんて『都

内なんだから一人暮らしの必要ないでしょ  
って瞬殺されたよー」

理菜「申し訳なきそうに」家から通えるのに  
一人暮らしなんて、親からしたら迷惑だよ  
ね……」

夏凜と市川、「しまった」と、顔を見  
合わせる。

夏凜「でもこれで終電逃しても大丈夫だし、  
彼氏できても理菜の家泊まったことにでき  
るから、私的には超ありがたい。うちの親  
戚しいからさ」

と、理菜の肩を抱く。

市川「そういうのは彼氏できてから言えよー」  
夏凜「うっぎ！ それはお互い様でしょーが。  
モタモタして、他の人にとられても知らな  
いよー？」

と、薄ら笑いを浮かべて市川を見る。

理菜「モタモタ？」

夏凜が口を開こうとすると、市川が夏  
凜の口を手で塞ぐ。

市川「あーあーなんでもない！ てか俺あつちだからここで。またな！」

目の前の看板には矢印が描かれている。右手は「工学部」、左手は「国際文化学部」と。

市川、右手に進む。

理菜「またねー！」  
と、手を振る。

夏凜、走り去る市川と手を振る理菜の背中を見て、

夏凜「やれやれ。世話が焼ける」  
と、呟く。

理菜「私たちも行こ」  
理菜と夏凜、左手に進む。

○同・講義室内

教壇を中心に扇状、壇上に席が広がる。スーツの学生たちがまばらに座る。教壇で職員が説明。  
学生たちは話を聞きながらメモをとつ

ている。

理菜と夏凜、隣同士に座っている。

理菜、自分を見つめる視線を感じてハッとする。

控えめに辺りをキョロキョロする。

夏凜「口パクで」どうしたの？」

理菜、首を横に振って、

理菜「口パクで」なんでもない」

と、前に向き直る。

○同・門の前（夜）

スーツの学生が次々と出てくる。

夏凜「また明日ね」

理菜「バイバイ」

理菜と夏凜、反対方向に歩いて行く。

○住宅街・道（夜）

理菜、後ろを気にしながら歩く。

後ろを振り返っても歩いている人は誰もいない。

直線の道を走り出す理菜。  
住宅街にカタカタとパンプスの音が響く。

○アパート・正面（夜）

理菜、走って帰ってくる。

立ち止まり、

理菜「ハアツ、ハアツ、ハアツ」

と、息を整える。

高橋、バイクでアパートまで戻ってくる。

バイクを停めてヘルメットを脱ぐ。

理菜「ハアツ、こんばんはっ。ハアツハアツ」

高橋「……どうしたの？ そんなに息切らし

て」

理菜「いや、ちょっと……」

高橋、理菜をずっと見つめる。

理菜「話しにくそうに」誰かについて来られてる気がして……」

高橋、顔色を変えてアパートの前の道



をキョロキョロ見る。

人は誰もいない。

高橋「真剣に）大丈夫。今は誰もいない」

理菜「明るく）ただの気のせいだと思いま

す！　なんかすみません」

高橋、鞆から荒々しくメモとペンを取り出して番号を殴り書く。

高橋「これ、俺の番号。もし何かあったら連絡して」

と、破ったメモを無理やり理菜に渡す。

理菜「目を見開いて）えっ!？」

高橋、階段を上っていく。

理菜も追いかける。

高橋「ちゃんと鍵かけて、誰か来ても出ない

こと！」

理菜「は、はい……！」

と、よく分からず頷く。

高橋「じゃあ」

と、部屋に入っていく。

理菜、目を丸くして渡されたメモを見

る。

○三田大学・食堂

一席でパソコンと教科書を広げる理菜  
と夏凜と市川。

夏凜「興奮して〜連絡先もらったぁー!?!」

理菜、ドキドキした表情で頷く。

理菜「…何かあったら連絡してって」

夏凜「目を輝かせて〜キャー! 何それ、ポ

ディガードみたい! ね、拓也?」

と、市川に話を振る。

市川「面白くなさそうに〜年齢不詳、何して  
るかも分かんないようなやつ、そんな簡単  
に信用していいのかよ。大体な、ただのお  
隣さんがそんな理由で連絡先渡しくるのが  
おかしい! 俺ん家マンションだけど、隣  
のおばちゃんと立ち話はしても、連絡先な  
んて渡されたことねーから! そいつ絶対  
怪しいよ」

夏凜「クスクス笑って〜隣のおばちゃんがな

んで拓也に連絡先渡すの」

市川「うるさい」

と、睨む。

夏凜、口をギュツと嚙む。

理菜「んー……でも悪い人ではないと思う。  
ちよつと不器用で人見知りなだけなんだよ。  
年齢も、多分私たちとそんなに変わらない  
し。夜に出かけてること多いから、多分夜  
勤の仕事なんじゃないかな」

夏凜「興奮して〜分かった。ホストだよ！

高橋さんかっこいいんでしょ？ 絶対そう  
だ！」

市川「今の話でよく分かった。そいつは絶  
対何かある。本当にヤバいやつはな、こう  
やって俺たちの生活に溶け込んで、油断さ  
せてくんだよ」

理菜「高橋さんはヤバい人じゃないから！

拓也はドラマとか映画の見過ぎ！」

理菜と市川の言い合いがヒートアップ  
し始める。

周りの学生が理菜たちをチラチラ見る。  
夏凜「うん、とりあえず落ち着こうね。ほら、みんな見てるから」

と、宥める。

理菜と市川、睨み合う。

市川「とにかく！もしなんかあったら、そいつじゃなくて俺に連絡しろよ」

理菜「別に大丈夫だって」

市川「意固地にいいから！」

理菜「意固地にいいってば！」

夏凜、呆れながら2人のやりとりを見守る。

成宮「あ、拓也こんなところにいたー！」

市川の後ろから同級生・成宮翔へ1

8と西原圭吾（18）がやってくる。

西原、理菜と夏凜に向かって、

西原「よ！お疲れ」

夏凜「お疲れ」

理菜「不機嫌な顔で」お疲れ」

西原、夏凜の耳元で、

西原「(小声で)なに、また痴話喧嘩？」

夏凜、口をへの字にして頷く。

西原、失笑。

市川「どうしたんだよ2人して」

西原「どうしたじゃねーよ。今日フットサル  
の新歓。忘れてる？」

市川「あれ夜からだろ？」

成宮「その前に練習顔だそって拓也が言った  
んじゃない」

市川「やば、そうだった」

と、荷物をまとめて立ち上がる。

目が合う理菜と市川。

理菜、気まずそうに目を逸らす。

市川、成宮、西原が席を離れる。

× × ×

市川の後ろを歩く西原と成宮。

成宮「さっきの子たちは……？」

西原「ああ。附属の同級生」

成宮「じゃあみんな内部組なんだ」

西原「俺は高校からだけど、拓也たちは中学

から一緒だから特に仲良いんだよ」

成宮「ほお（何か聞きたげな目）あのさ、」

西原が成宮の言葉に被せるように、

西原「彼氏ならいないと思う。でも左側にい

た子は狙わないでくれるとありがたい」

成宮「ニヤニヤして」もしかして……？」

西原「俺じゃなくて」

と、市川の背中に視線を向ける。

成宮、理解したように頷く。

成宮「じゃあ右側の子は狙ってもいい？」

西原「……別にいいんじゃない？　なんで俺に

聞くんだよ」

成宮「なんとなく？」

× × ×

理菜たちの席。

夏凜「拓也も理菜のこと心配なんだよ。アイ

ツこそ、不器用代表みたいな男なんだから」

理菜「うん……」

夏凜、やれやれという顔で理菜を見る。

○ 駅・ロータリー（夕方）

夏凜「ほんとに大丈夫？ やっぱ私有家まで一緒に行くよ」

理菜「そしたらまた私が駅まで送って行く」  
夏凜「（笑う）それじゃあ永遠と繰り返すだけじゃん」

理菜「とにかく大丈夫。まだ暗くなってないし、まっすぐ帰るから」

夏凜「じゃあ家着いたら絶対連絡してね！」  
理菜「分かった」

理菜と夏凜、手を振って別れる。

○ 商店街・中（夕方）

買い物をする主婦層で賑わう商店街の通り。

道なりに歩いている理菜。  
それを追う1人の影。

○ 住宅街・道（夕方）

理菜が歩いていると、20メートルほ

ど後ろから近づく足音。  
理菜の表情が強張る。  
歩きながらスマホを耳に当てる。

○三田大学・グラウンド（夕方）

ゼッケンを着てフットサルをしている  
学生たち。

市川「ナイスー」

と、ベンチから声を出す。  
バイブに気づいてポケットからスマホ  
を取り出す。  
理菜からの着信。

市川、目を見開いて電話に出る。

市川「もしもし!？」

と、立ち上がる。

市川「分かった。すぐ行くから、絶対電話切  
んなよ！」

と、走り出す。

○大通り・歩道（夕方）



市川、スマホを耳に当てながら全力疾走。

○住宅街・道（夕方）

理菜「ハアハアハアッ」

理菜、スマホを耳に当てながら走る。十字路に差し掛かった所で角から手を引かれる。

理菜「きやつ…」

手を引いたのは高橋。

理菜「高橋さん!？」

高橋「しっ！」

と、唇に指を当てる。足音が近づいてくる。角からそっと金原武（55）が顔を覗かせる。

高橋を見て逃げようと走り出すが、高橋が追いかけて捕まえる。

高橋「オツサン、ストーカーは犯罪だぞ」

金原「はぁ!? 何を言うんだ！ 俺はたまた

ま歩いていただけだ！」

高橋「へえ。たまたま、いつも同じ女の子を追いかけて歩いてた？」

金原「何の話だ！ さっさと離せ！ 警察を呼ぶぞ！ こんな冤罪だ！」

高橋、金原の胸ぐらをグツと引き寄せ、

高橋「低い声で」軽々しく冤罪なんて口にすんじゃないぞ」

金原、ゴクリと唾を飲み込む。

理菜に会話は聞こえていない。

理菜、高橋の後方から2人の様子を伺う。

× × ×

市川、曲がり角を曲がると数十メートル先にパトカーが停まっている。

理菜の姿も見えて、

市川「理菜！」

と、叫んで走る。

理菜「拓也！」

市川、練習着のまま。額には汗をかき、息が上がっている。

市川「ごめん……遅くなった。大丈夫か？」

なんもされてない？」

理菜「首を横に振って」大丈夫。来てくれて

ありがと（泣きそうに微笑む）

高橋が2人に近づいてくる。

市川、高橋を見て、

市川「この人は？」

理菜「市川に隣に住んでる高橋さん。たま

たま通りがかって、助けてくれたの。（高

橋に）友達の拓也です」

高橋「軽く頭を下げて」犯人は警察に引き渡

したからもう大丈夫だと思う」

市川「投げやりに」それはどうもありがとう

ございました！ 理菜、帰るぞ。送ってく

と、理菜に声をかけて歩いて行く。

理菜「戸惑って」あ、ちよっと！」

○アパート・正面（夜）

並んで歩く理菜と市川、そしてその後ろに高橋が続いてアパートの前に到着する。

市川、立ち止まる。

理菜「拓也？」

市川、高橋の方を振り向く。

市川「なんでついてくるんですか！」

理菜「しようがないじゃん。高橋さんも同じ

アパー

市川、理菜の言葉を遮って、

市川「理菜は黙ってろ！」

理菜「……」

高橋「(平然と)なんでと言われても。俺、彼

女の隣の部屋だから」

市川、イラっとした顔で、

市川「お隣さんだかなんだか知りませんが、

俺はあなたのこと信用してませんから！」

高橋「うん。簡単に人を信用しないのは俺も

賛成」

市川「はあああ!？」

と、高橋に詰め寄る。

理菜、市川を押し退けて、

理菜「高橋さんすいません。もう行ってください！今日は本当にありがとうございますいました」

高橋「君も彼を見習って、もう少し危機感もった方がいいよ」

理菜「反省して」ですよね……本当にご迷惑をおかけしました」

市川「理菜のことはお構いなく！こっちでどうにかするんで！」

理菜「もういいから！」

と、市川を必死に押さえる。

高橋、気にせず階段を上って行く。

○同・高橋の部屋の前（夜）

アパートの前ではまだ話している理菜と市川。

高橋、一瞥して部屋の中に入る。

○同・正面（夜）

市川、眉を顰めながらドアが閉まった  
高橋の部屋を見つめる。

理菜「高橋さん、ちよつとぶつきらぼうだけ  
ど、親切な人なのに。拓也は勘繰りすぎだ  
よ」

市川「危機感もてってアイツに言われたばっ  
かだろ!？」

理菜「分かってる。でも高橋さんは大丈夫。  
怪しい人じゃない。（自信満々に）私、昔  
から人を見る目には自信あるから！」  
市川、大きなため息。

○同・高橋の部屋の中（夜）

モノトーンで統一された部屋。  
本棚には法律の専門書がびっしりと入  
っている。

壁には長野県の地図が貼られ、バツ印  
や矢印で書き込み。  
机の上にはタブレットと新聞の切り抜

きが散乱。

高橋、椅子に座ってタブレットの電源をつける。

画面を操作していると、スマホに着信。

高橋、スマホを耳に当てて通話。

高橋「もしもし。連絡できなくてすいません。

ちよつとトラブって。あー大丈夫。大した

ことじゃないです。今から店行きます。は

い」

高橋、タブレットの画面を拡大する。

画面には人物相関図。

前田と明日香の写真の下には「死亡」の文字。

明日香から線が伸びて香澄と鈴木の写真もある。

高橋、真剣な顔で画面を見つめながら、

高橋「鈴木理菜。やっと見つけた」

と、呟いて立ち上がる。

人物相関図の中心には理菜の写真と名前。

丸で何重にも囲まれている。

(了)